

「やつれ衰の日記」訳注（一）

岡野幸夫

Yukio OKANO : An Annotation of "Yatsure-mino no Nikki", (Part 1)

鳥取短期大学研究紀要 第67号 抜刷

2013年6月

「やつれ蓑の日記」訳注(一)

岡野 幸夫

Yukio OKANO : An Annotation of "Yatsure-mino no Nikki", (Part 1)

衣川長秋著「やつれ蓑の日記」の現代語訳と注釈を試みる。本作品は同じ衣川長秋著の『田蓑の日記』と比較して、かなり小さな作品ではあるが、『古事記』や『伊勢物語』など、古典を背景とした叙述や、和歌の表現に興味深いものがあり、味読に堪える「古典」文学作品たりえている。原文は、『鳥取短期大学研究紀要』第 60 号に掲載した翻刻による。今回は序文および四月十九日までについて訳注した。現代語訳については、原文に忠実となるよう心がけたが、原文なしで独立して読んでも理解できるよう手を加えた箇所がある。また、和歌については、表現が複雑に絡み合っていて単線的な現代語訳が困難なケースが多いため、若干まわりくどい現代語訳になっている。本稿の目的は、本作品の表現を味読し、古典文学作品としての魅力を発掘しつつ、古文を読むことの面白さを紹介することとあり、現代語訳はその参考にすぎない。本稿の構成は、原文の内容にしたがって段落分けをしつつ現代語訳を掲げ、その後に語釈を掲げる。また、必要に応じて補注を加える。原文は、和歌を除き紙幅の都合により省略した。今後、数回に分けて続篇を予定している。

キーワード：衣川長秋 やつれ蓑の日記 訳注

序文(一オ～二ウ)

(現代語訳)

我がが^①衣川先生が、先ごろ出雲大社に^②ご参拝なさったときの^③旅日記は、^④兄弟子である^⑤國本道男が既に原稿を手に入れて、出版しようとして^⑥しているようだ。その年は都合が悪くて、出雲の^⑦美保神社や伯耆の^⑧大神山神社などには参拝なさることが出来にならなかったが、次の年にはわざわざ美保神社と大神山に参拝なさったので、

「日記もお書きになりましたか」

と尋ねたところ、

「書いてある」

と仰って、箱の底から取り出してお見せ下さったので、同じことなら、今回^⑨前の日記といっしょに出版したくお願したところ、お許し下さった。

さて、^⑩この日記は世間に出まわる余人の旅日記とは様子が違って、故事の遺跡の由来・由縁を^⑪かなり書き集めて教えて下さっているの、^⑫古典を学ばふ人だけでなく、国学を志す人にとっても、きつととても良い^⑬手引きになるだろうと、喜ばしく、学恩尊く思われて、このことを少しではあるが記すのである。

文政四（一八二二）年八月三日

因幡国^④加知弥^{（かちみ）} 神社神主^⑤ 飯田秀雄

（語釈）

① 衣川先生

原文「衣川の大人」。「大人」は「うし」と読み、人を尊敬して言う語。『日本書紀』に用例が見られ、上代語と認められる。小学館『日本国語大辞典』第二版「うし【大人・卿】」項の「語誌」欄には「中古から中世にかけて用例がなく、近世に復活して主に文学方面に用いられる。国学者たちが復古趣味によって古典から再生させた語の一つである。」とある。ここに限らず、本作品では上代語の使用が目立つ。これに関しては、岡野^{（二〇一）}を参照。

なお、衣川長秋の経歴については『鳥取短期大学研究紀要』第60号を参照。

② ご参拝なされた

原文「物したまひし」。「たまひし」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形。飯田秀雄が衣川長秋の過去の行為を想起する場面で用いられており、「き」の本来的用法である、「話し手が直接体験した過去の事実の回想」から外れ、単に「過去」を表す用法になっている。このような用法は、中世以降に見られるようになる。

③ 旅日記

文政元（一八一八）年七月二十七日から同年九月九日までの、出雲大社および周辺への旅行の日記である『田蓑の日記』を指す。これは文政四（一八二二）年二月序文（國本道男による）、文政五（一八三三）年九月発行であるから、本作品の序文執筆時点では、まだ出版はされていないことになる。しかし序文は執筆済みで、出版の準備は着々と進んでいたと思われる、飯田秀雄がそのあたりの事情を聞き知っていたことが、語釈⑥における伝聞の助動詞「なり」の使用と関わっていると思われる。

る。なお、『田蓑の日記』については、石破^{（二〇〇六）}を参照。

④ 兄弟子

原文「学ひのはらから」。序文の筆者である飯田秀雄が衣川長秋に入門したのは文化四（一八〇七）年、十七歳の時である。いっぽう、國本道男が衣川長秋に入門したのは享和三（一八〇三）年、衣川長秋が正式に鳥取藩に滞留を認められた年であるから、國本道男の方が兄弟子ということになる。（『藩士列伝』256、360頁）

⑤ 國本道男

八上郡佐貫村都波只知^{（つばきち）} 神社（現河原町佐貫の都波只知上神社）の社司。天保元（一八三〇）年、五十七歳で没。秀才に秀でており、藩内の国学不振を嘆き、上京して良師を求めて衣川長秋と出会い、享和三（一八〇三）年、鳥取に招聘する。

みずから筆頭弟子となり、飯田秀雄はじめ有志を勧めて入門させた。これを機に

鳥取藩の国学は隆盛に向かった。清貧に甘んじつつ、教育には熱心に取り組んだ。

著作として、国学の啓蒙書『皇国明弁』（文化十（一八三三）年）があり、衣川長秋の

序文、飯田秀雄の跋文がある（鳥取県立図書館に、他書と合綴したと思しき和本

が所蔵されているが、未見）。（『藩士列伝』360-362頁、『鳥取県史』74頁）

⑥ しているようだ

原文「すなる」。「なり」は伝聞の助動詞。『土佐日記』の冒頭に「をとこもすなる日記といふものを…」とあるのが有名。

⑦ 美保神社

原文「三保神社」。鳥根県松江市美保関町にある美保神社を指す。祭神は「三穗津姫命」（大國主神の後神。向かって右の御殿に鎮座）および「事代主神」（大國主神の御子神。向かって左の御殿に鎮座）。（『美保神社略記』）

⑧ 大神山神社

原文「大神山」。西伯郡大山町にある大神山神社奥宮を指す。祭神は「大己貴神（＝大國主神）」。（『鳥取県大百科事典』）

⑨以前の日記

本作品の後ろに、「附録」として「雨滝紀行」と「美徳山紀行」が付載されており、これら二つの紀行文を指す。以上三作品をまとめて一冊となした『やつれ蓑の日記』（版本甲＝原文の底本）の奥書にも「此二記行もこたびついでにしりにつけて板にゑらせつ 秀雄」とある。

⑩この日記

原文「この二記」。「二記」の意味として、A「日記」「二記」は「につき」の異表記とみる）、B「二つの記録」の二通りが考えられる。Aならば文献としての『やつれ蓑の日記』を指し、Bならば「やつれ蓑の日記」（こたびの日記）と「雨滝紀行」「美徳山紀行」（さきの日記）の二種類の日記を指すことになる。いずれにしても、全体の序文中での言及であるから、語釈⑨の三作品全体を指すものと思われる。

⑪かなり

原文「いさ、か」。辞書的意味としては「少し、ちよつと」ということになるが、それだと本文の内容が大したものではないということになり、序文の趣旨と矛盾する。ここは謙遜を装った誇りの表明であると読みたい。現代語でも、「これはちよつとすごいよ」などという場合の「ちよつと」は、必ずしも程度の小を意味しない。今後の検証を要するが、近世以降にこのような用法が現れた可能性を指摘しておく。

⑫古典

原文「みやひこと」。「優雅（上品）な言葉」の意だが、ここでは和歌の言葉や上代語も含めて考えたい。それは、本作品が比較的小規模であるにもかかわらず、三十首もの和歌を含むことと、意図的な上代語の使用が目立つことによる。和歌を学ぶことと、『古事記』をはじめとする上代の文献を学ぶことは、この時期の国学の重要なテーマであった。

⑬手引き

原文「たつき」。序文には濁点が附刻されておらず、清濁は不明。本来は「たつき」であるが、この時代には「たつき」「たつき」「たつき」の三様の語形があった。（『日本国語大辞典』第二版「たつき【方便・活計】」項）

⑭加知弥神社

鳥取市鹿野町にある。祭神は「彦火火出見命」「鵜葺葺不合命」「玉依姫命」。鵜葺葺不合命は彦火火出見命の子で神武天皇の父。また、玉依姫命は鵜葺葺不合命の母の妹。（『鳥取県大百科事典』）

⑮飯田秀雄

気多郡勝宿（現鳥取市鹿野町）にある加知弥神社の神職。寛政三（一七九〇）年生、安政六（一八五九）年没。六十九歳。國本道男は姉婿。文化四（一八〇七）年、十七歳の時、國本道男の勧めにより衣川長秋に入門。寛政八（一七九六）年、從五位下に叙せられ、筑前守と称する。文政年間に加知弥神社の社殿改築を發起し、天保元（一八三〇）年功成るも、工費補充のため、禁制を犯して演劇を開催したことが発覚し、天保三（一八三二）年、因幡・伯耆から追放の処分を受ける。よって紀州和歌山に赴き、本居大平に師事して国学を修める。また、本居大平門下の加納諸平の歌才を知り、次子年平を因幡から招いて共に歌学を学ぶ。天保五（一八三四）年、赦されて帰藩。これにより因幡の歌壇は柿園派（加納諸平の派）が大いに興った。著作として、歌集『樟齋集』（明治九（一八七六）年、年平により出版）がある。また、師衣川長秋の没後、衣川長秋の歌文集『瓊齋集』を編んだ。（『藩士列伝』256-257頁、『鳥取県史』76頁）

（補注）

この序文では、弟子の飯田秀雄が、師匠である衣川長秋の著作を世に出すことに対する晴れがましい気分を読み取ることができる。とくに後半部分では本文献の特徴が述べられており、そうした意識が見て取れる。

本文（一才「出發」）二ウ「赤碕」

（現代語訳）

やつれ蓑の日記

① 文政二年四月十八日、伯耆国の米子に行くということで、去年の秋、出雲大社を参拝しに行った時の② 田蓑・菅笠を、今年のために納めておいたのを取り出して見てみた。すると、ひどく傷んでいるが、これも去年の名残だと思ひ出されて捨てることもできず、縫い繕って、雨は降っていないが、③ 例によって人目を忍んで蓑笠を身に付けて④ 出發する。

今回も教え子の⑤ 藤田安躬（やすみ）が見送りということであるが、去年の出發の時は、幼子の⑥ 源太郎が幼くて、安躬についてきて⑦ 稲葉川の橋のもとまで送ってきて、私の後を⑧ 追いかけてようとして大泣きしたのでこりこりしたから、今回は連れてきていない。幼かった源太郎も一年経って成長し、あらかじめよく言い聞かせておいたので、聞き分け良く門の外で気持ちよく別れた。

① 五月雨に濡れて朽ちなん 去年（こぞ）の秋露にやつれし 田蓑菅笠
（去年の秋に露で傷んだ蓑笠は、今回の旅で五月雨に濡れて、きつと朽ちてしま
うだろう）

と詠み捨てて出かける。

④ 鳥取の城下町を離れ、千代川を渡って和歌を詠む。

② 河の名に立つ白浪ともろともに 千代も通はん 命長らへ

（⑩ 千代川の川面に立つ白波といっしょに、その川の名前にあやかっつて、いつ
つまでも生きてこの道を通いたいものだ）

① 湖山村、伏野村を通り過ぎ、内海村に着いた。去年の秋は、行きも帰りも

② 都合が悪くて⑬ 白兔神社に参拝できなかったので、今回は参拝する。この頃、

⑭ 天然痘が流行していたので、近辺の老人が孫を背負い、若い女性が赤子を抱きなどして、参拝する人がたくさんいる。拜んで和歌を詠む。自分はこの病気に罹らなかったのだ、

③ いもがさを病まざる人は稀なるを稀なる数に入るがかしこさ

（⑯ 天然痘に罹らない人はめつたにいないのに、自分は神の御加護によってその少数の中に入ることができ、有り難いことである）

⑱ 杖突坂を越え、宝木宿、青谷宿を通り過ぎて泊宿に宿をとって和歌を詠む。

④ かねてより思ひ定めてこの里にこよひ泊まりと宿り求めつ

（⑲ かねてより、この泊の里に宿泊しようと思ひ定めて、今夜の宿を求めたのだ）十九日。⑲ 辰の刻ごろに出發する。⑲ 海辺の道を過ぎ、⑲ 宇谷の山を越えて、橋津、

長瀬の宿を通り過ぎて由良宿に来て⑲ 乾飯を食べる。⑲ 去年の秋にここに来た時

は、夏の頃から日照り続きで、⑲ 田の稲が枯れそうになっていたところへ雨がたいそう降ったため、しばらくここで休憩した時に、⑲ お百姓さんたちが喜んでい
たことを思い出して和歌を詠む。

⑤ 天つ水 仰ぎて待ちし 御民らが作れる年の 甲斐はありけり

（⑲ 雨が降るのを天を仰いで待つていたお百姓さんたちが作ったコメは、手間暇かけて作っただけの甲斐があったというものだ）

⑲ 八橋、松谷を通り過ぎ、赤碕に来て⑲ 山崎政喜の家を訪ねる。政喜は京都に

出かけていて留守だったが、彼の父がたいそう引き留めるのでここに泊まること
にした。⑲ 去年の秋に出雲国に行った時は、政喜と一緒に行って、今年も一緒に
と約束しておいたのに、

⑥ 一声も聞かず聞かせず ほととぎす 都しまべに 立ち別れつる

（⑲ ほととぎすはお互いに声を交わすこともなく、都と田舎に別れ別れになっ
てしまった）

のはとても寂しいことだなあ。

(語釈)

① 文政二年四月十八日

原文「文政二とせといふ年の。卯月の十日まり八日の日」。ここは作品の冒頭部分で、表現に工夫を凝らしていることが予想される。紀行文学の嚆矢というべき『土佐日記』の冒頭二文目は「その年の師走のはつかあまりひとひのひの戌のときに門出す」(原文すべて仮名書き)と、日付部分を訓読する形式であり、この形式を模倣しているのではないか。『土佐日記』も本作品も、ここ以降、日付の箇所は直前で改行し、日付が行頭になるように書いている。日付は漢字で行頭に書かれていた方が読みやすさの点では優るが、冒頭部分では、その読みやすさを犠牲にしても、出発の日を特別なものと捉え、改まった、格式ばった表現を志向していると考えられる。ちなみに、『田蓑の日記』では以下のようにあり、そのような表現意図が本作品ほどはっきりと読み取れない。

○ことし文政の元年といふとしの。七月廿七日に。蓑笠とりきて。いたう人にもしらせず忍びやつして。卯の時ばかりに家を出。

雨ならで人めしのぶと小笠とりみのかくれて出る故郷。

とよみすて、行ほど。(『田蓑の日記』)

ここでは、津本^(二〇〇七)所収の作品から、冒頭で日付を訓読する形式を持つものを紹介する(適宜句読点を補う)。

○ことし文化の十一年といふとし、かの十三年忌といふをいとなみにとゆく。出立日は、なが月の十日あまり七日といふ日なり。

(小山田与清^(二七三十一―一八四七)『橋立日記 磯清水』天保十四^(一八四三)年ごろ刊)

○したしきかぎり一人ふたりにはかりてなん、ひそかに出たつ。時はかなな月廿日まりみかの日なり。

(香川景樹^(一七六八―一八四三)『中空の日記』天保六^(一八三五)年刊)

○ことしやよひ三かのひ、暁ふかうおきいで、桃のさかづきをくみかはすをわか

れにて、松江の草のどぎしをたちいでけり。

(藤田輔尹^(生没年未詳)『輔尹先生東紀行』文政三^(一八二〇)年成立)

○頃は長月十日あまり八日の日、また夜をこめて暁にいでたつ。

(富秋園海若子^(一七四一―)『伊豆日記』文政五^(一八三三)年刊)

○ささらぎはつかあまりひと日のひのうの時にかどです。

(藤井高尙^(一七六四―一八四〇)『出雲路日記』文政十三^(一八三〇)年刊)

前掲した香川景樹『中空の日記』の例にも見られるが、「まり」は「余り」が変化した語形。

② 田蓑・菅笠

『田蓑の日記』の旅行の時に着て行った蓑笠。『田蓑の日記』の書名の由来となった。本作品では、続けてそれがひどく傷んでいることが述べられている(原文「いたうやつれたれど」)が、これが本作品の書名の由来である。和歌も併せて参照。

③ 例によって

『田蓑の日記』の旅行の時も、「蓑笠とりきて。いたう人にもしらせず忍びやつして」(語釈①参照)とある。雨でもないのに蓑笠を身につけ、人に知らせずひっそりと旅立つ、というのが衣川長秋の好みだったか。あるいはそのような旅装の先例に倣ったか。

④ 出発する

原文「たちいづ」。関^(一九七七)によると、平安時代和文における複合動詞「立ち出づ」は主に「外ニ出ル」の意、「出で立つ」は主に「出発スル」の意で、両者ははっきりと意味内容の異なる語であった(第三章第一節「複合動詞「いでたつ」と「たちいづ」について」。本文献では、「いでたつ」はこの直後に名詞形「出たち」が一例と、四月十九日の冒頭に「出たつ」が一例あるのみ。一方「たちいづ」は四例見られ、こちらの方が優勢である(「雨滝紀行」「美徳山紀行」は「たちいづ」専用)。当該箇所についても、平安時代の語法に沿って「家ヲ出ル」と

解せなくもないが、他の「たちいづ」の用例を見る限り、「いでたつ」との区別が認められないばかりか、閏四月十二日に「米子を立いづ」という例もあるため、平安時代には存していた使い分けの意識は失われていると判断し、一律に「出発スル」と解することとする。

⑤ 藤田安躬

原文「安躬」。『田蓑の日記』に「をしへ子藤田安躬」とある。経歴等未詳。

⑥ 源太郎

衣川長秋の息子。長じて針医となり独立するが、その後鳥取を去り行方知れずとなった。（『藩士列伝』359頁、『鳥取県史』78頁）

⑦ 稲葉川

未詳。平凡社『鳥取県の地名』（日本歴史地名大系32）、新日本海新聞社『鳥取県大百科事典』、角川書店『角川日本地名大辞典』第31巻（鳥取県、『鳥取県史』に記載なし。本作品の記述を追うと、この後千代川を渡っているので、衣川長秋の自宅があった二階町（現鳥取市中心部。原文9丁表参照）と千代川の間にある川ということになる。候補として可能性が高いのは旧袋川だが、この川が「稲葉川」と呼ばれていた確証が見当たらない。後考を俟ちたい。

⑧ 追いかけてようとして大泣きした

※この項、岡野（二〇一）を参照。

原文「おひしかんとて。なきいさちたりし」。「おひしく（追及）」「なきいさちる（泣哭）」はともに上代語。

「おひしく」は「追いつく」意で、次の『古事記』や『万葉集』の例からは、憎悪や愛情の深さからくる追跡の激しさが読み取れる。

○故、其の伊邪那美命をなづけて黄泉津大神といふ。また云はく、其の追ひしきしを以て、道敷大神となづくといふ。（『古事記』上）

※イザナミがイザナギに追いついたところから道敷大神と名付けられた。

○穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作りましし御歌一首

後れ居て恋つつあらずは追ひ及かむ

道のくまみに標結へわが背（『万葉集』巻第二・115番歌）

※あなたに追いつきたいので、道々に目印を残していつてほしい。

また、「なきいさちる」は「激しく泣く」意である。

○速須佐之男命、命させし国を治らずて、八拳ひげ心の前に至るまで、啼きい

さちき。其の泣く状は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以て悪しき神の音は狭蠅なす皆満ち、萬の物の妖、悉に発りき。（『古事記』上）

事記（上）

※スサノオが母を恋うて泣き叫ぶと、もろもろの災害・凶事をもたらす。

本作品のこの場面は、父長秋についていききたい幼子源太郎が制止され、暴れながら激しく泣く様子を、『古事記』のイザナミ、スサノオの場面を借りて劇的に表現しようとしている。

なお、「おひしく」を同様に効果的に用いた近世末期の用例として、次のようなものがあり、胸を打たれる。

○幼き子を失ひける時

おひしきて取り返すべきものならば 黄泉つひら坂道は無くとも

（香川景樹『桂園一枝』雑上・200番歌）岩波古典大系『近世和歌集』による

※亡くなった我が子を取り戻せるなら、黄泉国の道なき道も何するものぞ。

⑨ 鳥取の城下町
原文「鳥名の大里の町」。藩主がいる鳥取の城下町をこのように尊称したものか。原文8丁裏にも「鳥名の里」と出てくる。

⑩ 2番の和歌

「立つ」は「名に立つ（有名な）」と「白波が立つ」の掛詞。渡し舟で渡河した（中林^(一九九七) 42頁）ので、川面に近い視線で詠んでいると思われ、「もろともに」の語が効いている。叶うなら長生きをして元気に往來したいという和歌であるが、衣川長秋はこの後約三年で亡くなるのである。今回の旅行でも、次回を期すとして、行かない場所があったり会わない人がいたりするが、それらはどうなったのか気にかかるところである。

⑪ 湖山村、伏野村、内海村

「湖山村」は現鳥取市西郊、湖山池の東北岸周辺。「伏野村」は同じく西北岸周辺。「内海村」は、現在の地名としては白兔から内陸に2 kmほど入った辺りに「内海中」があるが、行路として内陸に入り込み過ぎている。次に掲げた『田蓑の日記』の記述と考え合わせると、衣川長秋は千代川を渡った後、湖山池の北岸を海沿いに西進し、白兔神社に到達している（いわゆる伯耆街道を通った）。

○伏野村、内海村の浜辺を過ぐ。此所に兎神の社あり。（『田蓑の日記』、傍点岡野）

現在の白兔は、昭和二十八^(一九五三)年に改称されるまでは内海と称されていた（中林^(一九九七) 45頁）。すなわち、現在の白兔神社がある辺りも当時は内海村であったと考えられる。

⑫ 都合が悪くて

『田蓑の日記』によると、去年の往路は、米子から来る人と街道で出会うかもしれない、という予測があり、行き違いになるといけないので、約二町内陸にある白兔神社には行けなかった。また、復路は、九月九日（重陽の節句だからか？）なので、従者が早く家に帰りたいということで、休憩を許さなかったため、結局白兔神社には参拝できなかったのである。今回はそういうことがなく、ゆっくり参拝できたようである。

⑬ 白兔神社

原文「兎神」。『鳥取短期大学研究紀要』第60号の翻刻「鬼神」は岡野の読み誤り。鳥取市白兔にある。『古事記』の「因幡の素兎」の神話に由来する神社。祭神は「白兔神」「保食神」。病氣・怪我の平癒に靈験ありと言われる。（『鳥取県大百科事典』）

⑭ 天然痘

原文「疱瘡の病」。種痘によって予防できるが、鳥取藩における種痘は嘉永・安政ごろから行われ始めたようなので、文政二年の当時はまだ一般的ではなかった。（『鳥取県史』167-168頁）

⑮ 流行していたので

※この項、岡野^(三〇二)を参照。

原文「ほびこりたれば」「ほびこる」は上代語。各時代を通してより一般的に用いられる「ほびこる」とほぼ同義で、「一面に広がる」意を表し、次のような例が見られる。

○反歌一首

この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足らひに（『万葉集』卷第十八・423番歌・大伴家持）

※この雲が空一面に広がって、雨が存分に降ってくれないものかなあ。

この例は、天平感宝元^(七四九)年の早魃に際し、大伴家持が長歌を作り、それに添えた反歌である。衣川長秋がこの場面でなぜあまり一般的でない上代語「ほびこる」を用いたのか、その意図を説明する上で、この『万葉集』の例が大いに参考になるが、行論の都合上、詳細は語釈⑯で述べる。

⑯ 3番の和歌

ここまで、天然痘を表す語が三回連続して出てくるが、原文では「疱瘡の病」「かさ」「いもがさ」といずれも異なる語形になっている。このように、同じ語が連続して表現が単調になることを避けようとする意図が読み取れる。同様の例

が、8丁裏から9丁表にかけて願望表現が連続する箇所にも見られる。

⑰杖突坂、宝木宿、青谷宿、泊宿

「杖突坂」は現在の国道9号線白兔トンネルの南側を通る道。名前の由来は「弘法大師が杖で地面を突いて清水を湧き出させた」とか「鳥取から橋津までに数ある難所の最初で、ここから杖をつき始めるところから」などと言われている（中林（一九九七）451-452頁）。「宝木宿」は現鳥取市気高町宝木周辺。鳥取を出発して最初の宿駅である。伯耆街道と鹿野往来が合流するところで、江戸末期には繁盛していたらしい（中林（一九九七）454-456頁）。「青谷宿」は現鳥取市青谷町青谷周辺。日置川と勝部川が合流するあたりで、伯耆街道の宿駅であった（中林（一九九七）465-466頁）。

「泊宿」は現湯梨浜町泊周辺。ここも伯耆街道の宿駅だった（中林（一九九七）476頁）。

⑱4番の和歌

「泊まり」は地名の「泊」と、宿泊する意の「泊まり」との掛詞。

⑲辰の刻ごろ

およそ、午前七時から九時までの時間帯。日出（卯刻）から日没（酉刻）までの時間帯を等分に分割するため、季節によって一刻の長さは変化する。ここでは、日出の後、比較的すぐに出発したらしい。

⑳海辺

原文「海べた」。上代語。

㉑宇谷、橋津、長瀬、由良宿

宇谷は原文「鵜谷」。「橋津」は伯耆街道の宿駅で、江戸時代前期に藩倉が設けられ、年貢米が収納・積み出しされていた（中林（一九九七）477-478頁）。「長瀬」は倉吉往来と美作往来の分岐点に位置し、交通量が多く、伯耆街道の宿駅であった（中林（一九九七）479頁）。長瀬を過ぎると天神川を渡るが、江戸時代末期の安政年間（一八四〇-一八六〇）に架橋されるまでは藩による渡守がいて、無償で渡河できていた（中林（一九九七）480-481頁）。「由良宿」は現JR山陰本線由良駅周辺。江戸時代中期の享保

四（一七二九）年に藩倉が設けられ、その後同十七年に宿駅に指定された。また幕末には水路も開かれ、交通の要地となった（中林（一九九七）482-484頁）。

㉒乾飯

原文「かれいひ」。泊宿から由良宿までは約15kmで、早朝に出発するとちよほど昼時になると思われる。

㉓去年の秋

衣川長秋は文政元（一八一八）年七月二十七日から同年九月九日にかけて、出雲大社に参詣している。その折の紀行文が『田蓑の日記』として残されている。石破（二〇〇六）の翻刻によると、由良宿の手前で急に雨に降られ、由良宿で休憩した際、農民たちが慈雨だと喜んでいた、という箇所がある（七月二十八日条）。衣川長秋は、藩倉のある由良で昼食をとった時、まさに自分がいま食べている乾飯が、農民たちが去年作ったものだということを想起したことであろう。

㉔田の稲

原文「田なつもの」。上代語。「つ」は「の」の意の古い格助詞。

㉕お百姓さんたち

原文「御民ら」。上代語。

㉖5番の和歌

「あまつ水」は「雨」の意の上代語。また、「仰ぎて待つ」にかかる枕詞。「とし」は「稲」の意。先述の語釈⑮に掲げた『万葉集』大伴家持の歌の次の歌にも、
○雨の落るを賀く歌一首
わが欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言挙げせずとも年は栄えむ（『万

葉集』巻第十八・4124番歌・大伴家持）
※私が望んでいた雨が降ってきた。この分なら心配しなくても豊作だろう。とある。

語釈⑮で保留した、上代語「ほびこる」の使用意図であるが、衣川長秋は弟子

たちへの教育効果を狙ったのだと考える。すなわち、見慣れない「ほびこる」という言葉をあえて用い、不審に思った読者が調べると『万葉集』の423番歌に行きつく。それを学んだうえでこの箇所を読むことで、国の根本たる農を支える農民の仕事に対する敬意を涵養したり、雨を呼ぶ歌の力を知らしめたりする意図があったのではないか。

⑳ 八橋、松谷、赤碕

「八橋」は伯耆街道から倉吉往来が分岐する交通の要地で、宿場でもあった(中林^(一九九七) 487頁)。鳥取藩家老津田氏の陣屋町として賑わった(中林^(一九九七) 491頁)。「松谷」は原文「松が谷」。現琴浦町松谷付近。「赤碕」は原文「赤崎」。伯耆街道の宿場町で、鳥取藩の船番所や藩倉もおかれていた(中林^(一九九七) 494頁)。

㉑ 山崎政喜

『類題和歌鯁玉集』の『作者姓名録』四編に「政喜伯耆八幡郡赤崎神主 山崎伊勢守」とあり(中澤、宮崎^(二〇〇六) 509頁)。経歴等未詳だが、幕末の資料ながら「慶応二年寺院神職直触帳」に「伯州在中永代直触」として「八橋郡赤崎村 山崎伊勢」とある(『鳥取藩史』)。神職は基本的に世襲だったため、政喜も神職だったらしいことがわかる。『田蓑の日記』七月二十八日条によると、父親の代に因幡から移住してきたらしい。

㉒ 去年の秋

語釈^㉒で述べたように、衣川長秋は文政元年に出雲大社に参詣する旅行をしているが、その折に山崎政喜を伴っている。

㉓ 6番の和歌

山崎政喜に会えなかったことを、ホトトギスの声が聴けなかったことになぞらえた和歌である。「都しまべ」は難解。「都島の周辺」の意か。あるいは「都」と「島辺(＝田舎)」を対比する意か。管見に入った和歌の用例は以下の数例に過ぎない(角川書店刊『新編国歌大観』全十巻の索引で「みやこしまべ」を検索し

た結果による)。

○おきのゐ、みやこしま

をのこまち

おきのゐて身を焼くよりも悲しきは都しまべの別れなりけり

(『古今和歌集』巻第二十・1104番歌)

※『伊勢物語』『小町集』『和歌名所名寄』にも同様の和歌あり。

○みやこじま

弘長元(二二六)年中務卿親王家百首 権僧正公朝

わかれぢに身を焼くおきの数そへて都島べに飛ぶ螢かな

(『夫木和歌抄』巻第二十三・雑部五・10580番歌)

※『夫木和歌抄』は鎌倉時代後期に成立した類題和歌集。

○波の上に猶おきのゐて身を焼くや都島べの螢なるらん

(『逍遊集』巻第二・夏歌「水辺螢」題・874番歌)

※『逍遊集』は江戸時代前期の俳人、松永貞徳の家集。

当該箇所は、衣川長秋が山崎政喜に会えなかったことが書かれてあり、しかも山崎政喜は他ならぬ京都に行っているということなので、政喜は「都」に行き、自分は「島辺(＝田舎)」にいる、ということと和歌にしたものと考えるのが適当か。

この和歌の表現上の特徴としてもう一点重要なことは、前後の地の文と文脈上つながっていることである。すなわち、原文では、

○政喜をいざなひて今年もとちぎりおきしかど

一声もきかずきかせず時鳥都しまべに立わかれつる。はいとさうく

しきわざなりや。

となっていて、和歌の末尾が連体形として続く地の文へと連続しているのである。つまり、文章の一部分が和歌になったような趣である。このようないわゆる「歌文融合」は『土佐日記』や『和泉式部日記』に散見する。

○海を見やれば、雲もみな波とぞ見ゆる海人もがな いづれか海と問ひて知るべく となん歌よめる。（『土佐日記』正月十三日条 38頁）

この例では、和歌の先頭部分が地の文に融合している。

○「略」。うちすてて旅ゆく人はさもあらばあれまたなきものと君し思はば ありぬべくなん」とのたまへり。（『和泉式部日記』422頁）

この例では、和歌の末尾部分が会話文に融合している。

野口（二九九七）は、『和泉式部日記』の歌文融合について、和歌の言語と日常言語の地位の差が縮小してきたこと、逆に言えば日常言語が和歌の言語に近い洗練されたものになったことを、歌文融合の発生要因と考えている。これによって地の文の洗練度を高めようとする意図があるとする。

当該箇所は、著者の衣川長秋が洗練された文章の実例として歌文融合の技法を示すことによって、弟子の教育に供しようとしたものと考えられる。その点で、語釈⑳と同趣旨の表現意図がはたらいていると思われる。

（補注）

本作品では、全体的に文章の時制が現在形を基本としている。執筆の実情としては、夜、宿に着いてからその日の内容を書くか、旅行が終わって帰宅してからメモ類を元を書くか、のいずれかであろうが、文章は現在形を基本として書かれている。これは、読者を作品世界に誘導し、あたかも作者と一緒に旅をし、景色を見ているかのような臨場感を与えるための技巧であろう。

また、語釈①⑧⑮⑯⑳㉑㉒に見られるように、本作品は小品ながら、『田蓑の日記』よりも、表現技巧に意を注いで執筆されたもののように見受けられる。

地名の呼称について、単なる村は「○○村」と呼び、宿駅がある村は「○○(○)宿」と呼ぶというふうには、呼び分けていることが分かる。

江戸時代の旅行は基本的には徒歩である。夜明けとともに起床して出発し、日

暮れ方に宿に到着するのである。本稿で扱った四月十八日の旅程は鳥取から泊ま
で、『田蓑の日記』によれば七里（五十町を一里と数えているので約38km）で
あるが、実測としてもほぼ正確である。また、四月十九日も同様の距離を歩いて
いる。日に40km近くも歩く旅を何日も続けるとは、当時の人の健脚ぶりには驚く
ばかりである。そのいっぽう、文字通り「歩く速度」でものを見ながらの旅は、
さぞや楽しかったことであろう。石破氏も石破（三〇〇六）で述べておられるが、「大
きい・多い・速い」を良しとする現代の価値観も、多少は見直すべきなのかもし
れない。

（参考文献）

- ・鳥取県編『鳥取藩史』第一卷（世家・藩士列伝）、第四卷（寺社志）、鳥取県立鳥取図書館、一九六九
- ・関一雄著『国語複合動詞の研究』、笠間書院、一九七七
- ・鳥取県編『鳥取県史』第五卷（近世文化産業）、鳥取県、一九八二
- 第一章第二節「国語と和歌」50～96頁（山本嘉将氏執筆）
- 第一章第五節「医学」157～184頁（森納氏執筆）
- ・新日本海新聞社鳥取県大百科事典編集委員会編『鳥取県大百科事典』、新日本海新聞社、一九八四
- ・中林保著『因幡・伯耆の町と街道』、富士書店、一九九七
- ・野口元大著『和泉式部の文と歌』、『上智大学国文科紀要』第14号、71～92頁、一九九七
- ・日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇～二〇〇二
- ・石破洋編著『鳥取藩国学者 衣川長秋『田蓑の日記』影印・翻刻と研究』、私家版、二〇〇六

- ・中澤伸弘、宮崎和廣編『類題和歌 鯁玉・鴨川集 三二』、クレス出版、二〇〇六
 - ・津本信博著『江戸時代後期紀行文学全集』第一卷、新典社、二〇〇七
 - ・岡野幸夫著「衣川長秋「やつれ蓑の日記」に見られる上代語」、『北東アジア文化研究』第34号、69-84頁、二〇一一
 - ・「美保神社略記」(境内にて販売しているパンフレット)
- ※『古事記』『万葉集』『土佐日記』『和泉式部日記』『桂園一枝』の本文は岩波日本古典文学大系による。ただし、読みやすさを優先して表記を改めた箇所がある。